内モンゴルのスニド左旗における牧畜民の固定施設について
―固定家屋と畜舎の普及状況と建築動機

The immobilization facilities for Nomads in Sonit left banner Inner Mongolia-Motivation for the popularization and construction of houses and sheds

ウニバト
WUNIBATU

要旨 : 本論では内モンゴル自治区スニド左旗バヤンタル・ガチャ[1]における 28 世帯の事例に基づき、牧畜民の固定家屋と畜舎の普及状況、建築動機、固定施設の位置設定について検討する。その結果、①当該ガチャにおける牧畜民の固定家屋と畜舎の建築が 1990 年代の牧地の各世帯別に分配された次第に早まった。②初期では資金に余裕のある牧畜民が固定家屋を立てた。③ 2002 年以降、政府による資金援助が挙げられる。動機においては牧地の分配は間接的な動機となり、政府による資金の援助が直接動機になった。

以上の論述を通じて、牧畜民の定住化過程において固定式建物がどのように普及してきたかという課題を理解しようとするのが本論の目的である。

1．はじめに

モンゴル高原で遊牧を行なってきた牧畜民の遊牧移動と固定式建物については、かつて 1940 年代に今西と梅棹が、現在の中国内モンゴル自治区（以下、内モンゴルとする）で実体調査を行なった（小長谷 2003:69）。当時代のスニド部（調査地帯は主に現在のスニド左旗）とチャハル部（1949 年以前のチャハル盟）における牧畜民の遊牧移動と固定式建物については、「チャハルの南部では、モンゴル人たちも、モンゴル・ゲルのほかに、たいていはバイシン・ゲル[2]（*baising・γer*）を持ち、季節移動は行わないのが普通である。チャハル北部になるとたいていは冬営地と夏営地との間を移動する。スニド部に入ると春営地、秋営地などという言葉があらわてくる。最大、年に 7 回移動する」（梅棹 1991:74）と述べられている。スニド地域の遊牧移動の回数は南部のチャハル地域より頻繁で、固定家屋を中心とした定住化現象はなかったことがここで明らかとなる。固定家屋はモンゴル語で「バイシン・ゲル」と呼ばれている。

そして、「牧畜民はなぜ遊牧移動をおこなうのか」という問題に対しての今西らの考え方は、有蹄類動物群の遊動に起因するものであって、人間の移動は、それによく適応したものである（梅棹 1991:79）という仮説である。遊牧民たちは決して植生の多寡に応じて移動しているわけではなく、いわば家畜が生物学的に生来保持している移動性に応じて人がつきしたがっている（梅棹 1990:123-156、小長谷 2003:69）という。この説が今まで、権威のある遊牧起源論として認められている。

しかし、1950 年代後半期から現在に至る内モンゴルでは、遊牧移動の在り方が変わってきた。遊牧民の定住化が著しく、移動実態そのものが大きく変貌した（小長谷

1　ガチャ（*γačaγ-a*）とは : 内モンゴル自治区の行政区位である。村に相当する（出典 : 蒙漢辞書 p:746）。
2　バイシン（*baising*）とは、中国の「百姓」という言葉である。「バイシン」が漢族農民の居住していた土木構造の建物の名称である。モンゴル・ゲルと区別するため「バイシン」と呼ばれるようになったという（ハスバガナ、スチント 2009:109）。

2003:69)。数年間にわたって移動範囲および移動距離はひたすら減少する一方、固定施設への依存度が高くなってきた。本論で述べる固定施設は、人の居住の固定家屋と家畜の畜舎や囲いを指す。こうした固定家屋と畜舎の組み合わせのことを一つの定住点としてみることができる。

内モンゴルの全地域で、1958 年後半に人民公社[3]が設立され、組織的な草原開発政策が行われた。数多くの地域で「国営牧場」、「国営林場」、「牧畜改良中心」、「機械井戸」などが作られ、バリガード[4]（*bariγada*）中心地に固定式建物が建設された。これが草原で初めての大規模の固定施設と見られている。しかし、その時代には遊牧移動が全体的に維持されていたという（海山 2012:5）。

文化人類学者の小長谷が内モンゴルシリンホト市周辺の牧畜民の移動範囲の変化を復元した研究結果では、牧畜民の本格的な定住化は 1970 年代から始まっていることが確認できる。牧畜移動の距離および範囲が半減すると同時に、冬、夏と春営地を結ぶ形状が三角形状に変化した。冬営地と春営地に固定的拠点、家畜のための囲いが建設され、固定的に利用されるようになった。春営地の固定化こそ、移動の全体的な縮小を意味する（小長谷 2011:193)。本論文の調査対象地であるシリンゴル盟スニド左旗のバヤンタル･ガチャでは、1979 年から 1980 年にかけて、各「ホト・アイル」あたりの冬春営地に畜舎と囲いが建設され、固定化施設が普及するようになった（チデンザブ 2011:73)。これらが「ホト・アイル」のなかで共用施設として使われ、遊牧移動の距離も同時に縮小した。

1980 年代初期から内モンゴルでは人民公社が解体されると同時に「生産責任制」が導入された。人民公社の共用家畜と牧地が 1983 年から 1996 年にかけて、各世帯当たりに分割した。家畜と土地の分配により、牧畜民の経営形態が集団グループの「ホト・アイル」からそれぞれの世帯へと変化した。同時に季節的移動が不可能となった。そして、家畜の商品化の進行により購入物品が増加したことで、牧畜民は分配された牧地のなかで漢族風の固定家屋を建築して居住するようになった。固定家屋は季節移動を行わない状況下では簡便であり、物品の収納や発電機の設置に有利である上、オンドルやスチームなどの暖房設備も完備しうる（尾崎 2003:15)。牧地の分配以前は宿営地の固定施設化が進行し、土地が分配された後、固定家屋の建築が進行するようになった。

牧畜民の定住化という視点から小長谷（2001、2003）は、シリンホト市周辺の牧畜民の事例の下に 30 年間の長期的移動の変化を春営地の固定施設化と関連づけて定住化過程を明らかにする研究を行った。調査例では、1970 年代に入ってから春営地が固定施設化され、宿営地を結ぶ移動形状が三角形状に変化し、定住化が進んだ。阿拉騰（1999）は、もともと冬営地と夏営地の 2 つの放牧地の間の遊牧は基本的な構造であり、雪害や寒さなどを防ぐために冬営地に固定家屋を建てるのが一般的であったとする。しかし調査例では居住地として夏営地に家屋を建てて定住が行われていた。児玉（2012）は、内モンゴルのオルドス地域の農耕民とゴビ地域の遊牧民の事例を取り上げて、1980 年代改革開放から現在ま

3　人民公社とは 1958 年末期から 1983 までの時期で、いわゆるネグデル（*nigedül*）のことである。人民公社は旧ソ連のコルホーズをモデルとした集団農場経営である。組合員は人民公社の労働者となり、人民公社の家畜を飼養し、給料をもらう。

4　バリガード（*bariγada*）とは：1958 年～ 1983 年にかけて、人民公社の下行政区である。バリガードが大バリガードと小バリガードと分けられる。小バリガードは現在のガチャと同じ。中国語では生産隊、略で「隊」ともいう。

でにかけて、牧畜民の定住化が不可逆的に進行したことを検討し、牧畜民の現代的変容とそのプロセスや定住した後の実態を明らかにする研究を行った。尾崎（2019）の内モンゴルを対象とした研究では、1990 年代に至るまでの季節移動の変化、および 1977/78 年のゾド[5]（Zud）がシリンゴルにおける牧地の分配や宿営地の固定施設化に間接的に及ぼした影響について検討した。事例となった地域では、1987 年より固定家屋・家畜小屋・家畜囲い・干し草貯蔵を作り始め、1992 年末までに、牧畜民世帯は牧地を鉄条網で囲った。1993 年の調査時点では 90％以上の牧畜民が固定家屋を建設したという。

定住生活や自然環境の変容と政策に関する研究では、中尾ほか（2007）が中華人民共和国成立以降の「大躍進」「文化大革命」「改革開放」「西部大開発」などの政策により、黒河流域における牧畜民の定住生活環境や自然環境の変化を概観し、人びとのライフヒストリーという面から、黒河流域における 50 年の歴史を照射している。さらに再定住化という視点から小長谷ほか（2005）は、異なる角度から生態環境問題により再定住した世帯に生じる生活習慣の変化、社会的と経済的問題を明らかにする研究を行った。そして、遊牧移動の重要性（Humphrey and Sneath1999）、遊牧放牧と定住放牧の比較、定住遊牧の環境への影響などについての研究も行われている（星野 2009;2012、海山 2012;2014）。

牧畜民の居住形態の変化や固定家屋に焦点を当てた先行研究としては、野村ほか（2010）のシリンゴル盟フベートシャル旗における牧畜民の「ホト・アイル」の変化や定住化に伴う居住形態の変化に関する一連の研究の蓄積がある。阿栄ほか（2018）は、アラシャ右旗の牧畜民の事例の下に固定家屋の各時代間取りの変容、固定家屋の普及と季節利用状況に関する調査研究を行った。那木拉（2012）はゲルから固定家屋への移住とその構造、組み立て方、使い方、材料に関して分析し、さらに環境への配慮について述べた。

本論文の目的は、内モンゴルの乾燥草原スニド左旗のバヤンタル・ガチャの 28 世帯の調査データに基づき、まず牧畜民の 1980 年代以降の固定家屋と固定畜舎のそれぞれの建築年、普及状況と各年代における建築動機について考察する。次はより詳細な調査を行った事例 1 である牧畜民 N 氏によって、氏の放牧範囲の変化から始めて固定家屋と畜舎の建築過程、牧地での位置の設定、関連した付属施設について明らかにしたい。

2. 研究方法

本論は、内モンゴル自治区シリンゴル（錫林郭勒）盟スニド左旗のバヤンウール・ソム（巴音烏拉・蘇木）のバヤンタル・ガチャ（巴音塔拉・嘎査）での 3 回にわたる調査データに基づいている。2012 年 8 月に 44 世帯へ聞き取り調査を実施し、2014 年 8 月に 28 世帯へ補助調査を実施した。聞き取り調査の内訳は家族の構成、居住状況、固定家屋の建築時期とその動機、家屋の構成、部屋の間どり、牧地面積、家畜頭数、収入と支出、牧地環境、井戸などについてである。各世帯の家屋の正面写真による記録調査も行った。本論では、補助調査を行った 28 世帯の事例を取り上げる。2019 年 6 月に、元副ガチャ長と秘書員であった N 氏（表 1 の事例 1）へ聞き取り調査を行った。表 1 は事例の 28 世帯の基本状況を表示するものである。事例の世帯を年齢別に分けて、1 ～ 28 号までの番号をつけた（表 1）。60 代は 7 世帯、50 代は 6 世帯、40 代は 11 世帯、30 代は 4 世帯である。内容

5　ゾド（Zud）とは：夏の干ばつに続き、豪雪や極寒の冬が訪ねる自然雪害のことを指す。

は家族構造、土地面積、家畜、土地の分け取りである。

表 1　調査対象 28 世帯の基本情報

事例	世帯主年齢		家族構成			土地面積（ム）	平均土地面積（ム / 人）	五畜の数					牧地の分け取り			
			人数	60 歳以上	子供			ウマ	ラクダ	ウシ	ヒツジ	ヤギ	春	夏	秋	冬
1	60代	69	5	0	0	12900	2580	0	0	20	100	130	無	有	無	有
2		61	7	2	2	17407	2486.7	32	120	60	50	0	無	有	無	有
3		64	5	2	1	8000	1600	6	0	25	150	100	無	有	無	有
4		66	3	1	0	20009	6669.7	40	0	14	200	30	無	有	無	有
5		63	3	1	0	13000	4333.3	15	49	30	100	100	無	有	無	有
6		64	2	0	0	9000	4500	0	0	40	500	40	無	有	有	有
7		65	6	0	0	15480	2580	15	0	7	200	60	無	有	無	有
8	50代	53	5	0	0	14767	2953.4	8	0	15	240	30	無	有	無	有
9		52	4	0	0	13900	3475	1	0	0	500	10	無	有	無	有
10		50	3	0	0	8700	2900	0	0	15	200	50	有	有	無	有
11		51	3	0	0	13000	4333.3	30	0	30	300	30	無	有	無	有
12		56	3	0	0	8593	2864.3	0	0	0	50	20	無	無	無	有
13		54	5	1	1	13790	2758	0	0	5	250	30	無	無	有	有
14	40代	42	4	0	2	13300	3325	60	0	0	120	150	無	無	無	有
15		45	4	0	2	5860	1465	30	0	28	300	20	無	無	無	有
16		47	6	2	1	13000	2166.7	10	0	60	200	100	無	有	無	有
17		40	4	0	2	8700	2175	22	12	22	200	100	無	有	無	有
18		42	5	0	2	9800	1960	0	0	50	650	150	無	有	無	有
19		47	5	1	1	5000	1000	0	0	2	300	70	無	無	無	有
20		48	6	1	2	10000	1666.7	0	0	0	340	60	無	有	有	有
21		42	3	0	0	7044	2346.7	0	0	0	500	200	無	有	無	有
22		48	1	0	0	9494	9494	0	0	0	150	30	無	有	無	有
23		46	2	0	0	8700	4350	0	0	50	600	120	有	有	無	有
24		41	3	0	0	3000	1000	0	0	0	290	40	無	有	無	有
25	30代	36	3	0	1	17684	5894.7	100	0	70	100	200	無	有	無	有
26		34	5	0	0	13340	2668	0	0	20	200	50	無	無	無	有
27		37	4	0	0	15000	3750	0	0	10	400	40	無	有	有	有
28		35	4	0	0	13650	3412.5	0	0	10	300	50	無	有	無	有

3. 調査対象地の概要

（1）基本状況

バヤンタル・ガチャはスニド左旗政府の中心地マンドラト（満都拉図）鎮から東北に向かって 30km 離れた、スニド左旗の東北部に位置する（図 1）。バヤンタルという言葉は「豊かな草原」という意味のモンゴル語である。ガチャの総合土地面積は 70,000ha（1050,000 畝）で、人口は 408 であり、1 人当たりの平均面積は 169ha（2592.6 畝）である。

年間平均降水量は 200mm の前後である。それに対して、年間平均蒸発量は 2500㎜に達

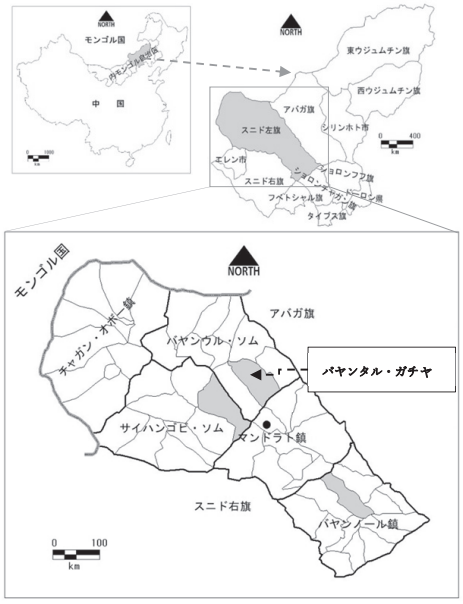

図１　調査対象地スニド左旗バヤンタル・ガチャ

する極度の乾燥地域である。年間降水量の 60％～ 70％が 6 月から 8 月の間に集中し、植物の生育に不可欠な条件となっている。降水量を反映して荒漠乾燥草原の植生が広がり、ウマ、ラクダ、ウシ、ヒツジ、ヤギの五畜が放牧されている。

本ガチャは、チデンザブ（2011）によれば、家畜を個人に分配した 1984 年の時点では、総人口は 68 戸、290 人から構造され、その飼養する家畜頭数は 15,930 頭（SSU[6]）であった。2014 年 8 月の聞き取り調査を行った時点では、総戸数は 120 戸、人口は 408 人増加し、家畜頭数は 30,585（SSU）頭に達していた。さらに他のガチャから当ガチャにもたらされて、帳簿上に現れない家畜も放牧されているという。外部から移住してきた漢人は 1984 年には 6 人であったが、2014 年には 36 人になっていた。過去 33 年の間に人口が 1. 4 倍に増え、家畜は約 2 倍に増えた。

（2）家畜と土地の分配

国家の定める政策にしたがって、当該ガチャでは 1984 年から具体的な家畜の私有化分配と牧地の分配が決定され、実践されてきた。人民公社時代の旗の下位単位大バリガードがソムに代わり、その下位単位の小バリガードがガチャと呼ばれることになった。

家畜の分配については、1984 年 6 月に共用の家畜が世帯ごとに構成人数によって分配された。ガチャの 30％の家畜を本ガチャで 2 年間労働経験があった人に均等に分配し、70％の家畜が子供を含む全ての人々に均等的に分配された。分配した家畜には値段が付けられ、牧畜民は 10 年間でその代金をガチャに返還すると決められた。そのうちラクダとウマは集中的にいくつかの世帯に分配された。例えば、72 頭のラクダがその時ラクダを放牧していた牧畜民に分配され、ウマを放牧していた 8 世帯にウマが中心に分配された（チデンザブ 2011:81）。

6　SSU とは Standard Stocking Unit の略で、内モンゴル自治区で一般的に使われるのはラクダ 6、ウマ 5、ウシ 5、ヒツジ 1、ヤギ 1 という割合である。

牧地の分配については、家畜の分配と同時に開始され、1984 年から 2001 年の間に行われた。1984 年から 1991 年にかけて、ガチャの中心地、ガチャの共用地を除いて、21 個に分割された。この分配方法はモンゴル語で「ホト・オス（＝宿営地・水）」による分配、と表現される（小長谷 2003:75）。当時は 68 戸であってから、牧地を平均的に 3 から 4 戸で分配したことになる。つまり、1 つの井戸を共同で利用する 3 ～ 4 つの戸から構成される宿営地集団よって大まかな牧地分配がなされていた。各世帯の人口を優先し、家畜の所有頭数を参考に牧地が分配された。ガチャの全ての土地の 55％～ 65％が人口によって分配された。30％～ 40％の牧地が家畜の所有頭数を参考に分配された。ガチャの共用牧地としては 5％が残されると決められた（スニド左旗牧畜誌　1995:127）。

この方法では、複数戸の間で 1 ～ 2 つの畜舎や井戸を共同で利用し、土地の使用料の支払いに混乱が生じたので、1991 年から戸単位で分配することになった。

1996 年ガチャ内で結婚などにより独立した戸数を加えて調整し、第二段階の土地分配が行われた。「ホト・アイル」の範囲で使用していた土地がさらに世帯別に分配され、スニド左旗の草原局の測量により各世帯の使用できる土地の境界線が決められた。当初何も目印がなく、のちに坑のようなものが目印として打たれた（児玉 2012:69）。2001 年に、バヤンタル・ガチャでは土地の世帯別分配がさらに修正され、現在に至っている。戸単位による牧地分配が初めて実施された 1990 年代から、鉄線で牧地を囲う戸があらわれるようになった（小長谷 2003:76）。2019 年の調査時点で、分配された牧地の全てが鉄線で囲われている。

（3）固定施設の増加

前述のように、牧地の分配により季節的移動が不可能となった。その一方、家畜の商品化の進行により購入物品が増加したことで、牧畜民は分配された牧地のなかで漢族風の固定家屋を建設して居住するようになった。本ガチャの牧畜民は現在完全に定住している。バヤンタル・ガチャの 1980 年代初期と 2014 年 8 月の固定式建物を比較してみれば、大きな変化が見られる。図 2 は季ほか（2011）のデータに基づいて、筆者が ArcGIS 用いて作った図である。図は 1980 年代におけるバヤンタル・ガチャの固定式建物の数件を表示する。1980 年代に当該ガチャは 21 個の「ホト・オス」で構成され、 1 つの「ホト・オス」に 1 ～ 3 つの固定式畜舎と囲いがあり、31 箇所で建てられていた。これらの固定式畜舎の大部分は 1978 年から 1980 年にかけて建てられたものである。1977 年の大雪害の後、トラクターなどの購入によって、本ガチャで定住式畜舎の普及が急激に加速してゆくことになった（チデンザブ :73）。

図 3 は 2014 年 8 月のスニド左旗土地資源管理局のデータより、Arc GIS を用いて作った図である。図の 1 つの点は、牧畜民の定住点を示す。牧畜戸の定住点は固定家屋、畜舎や囲いから構成される。バヤンタル・ガチャはこの時点で、ガチャ委員会の建物を含めて 96 箇所に定住点が建てられている。これは 1980 年代から 3 倍以上に増えた。定住点の分布は井戸の影響を受けて、局所的に集中している特徴が見られる（図 3）。

次の章では、これらの 96 所の定住点の建築年とその動機について、28 世帯の事例の調査データから分析する。28 世帯はガチャ中心地の周辺、中部地域の牧戸である。

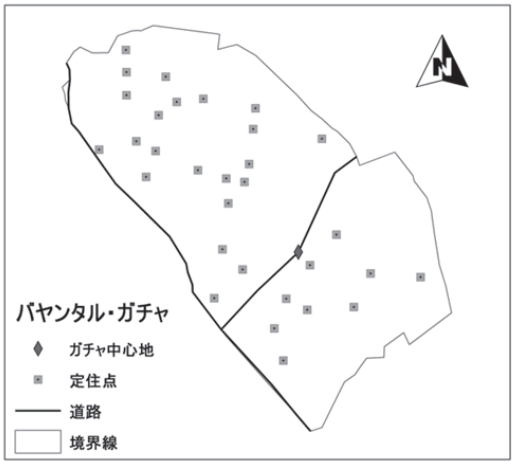

図 2　1980 年代における定住点

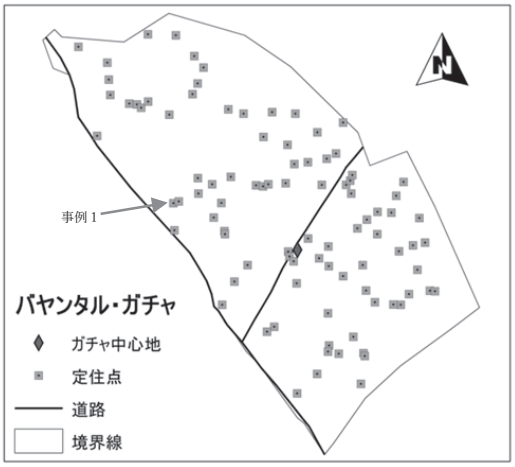

図 3　2014 年における定住点

4. 固定式建物の調査データ

以下の表 2 は、調査事例 28 世帯の年齢の順番によって、配列したものである。事例 1 ～ 7 の世帯主は 60 代、8 ～ 13 の世帯主は 50 代、14 ～ 24 の世帯主は 40 代、25 ～ 28 の 4 人は 30 代である。一番多かったのは 11 人の 40 代である。

（1）固定式建物の築年、政策の関連

固定式建物を時代区分として 1958 年から 1983 年にかけての人民公社時期、1983 年から 1996 年にかけての「包産到戸」時期、1996 年以降の土地分配後の時期という 3 つに分けることができる。前述のように、バヤンタル・ガチャでは、1970 年代に入ってから宿営地で固定式畜舎と石囲いの建設が始まった。それ以前はガチャ中心地、国営牧場などの以外に固定建物は少なかった。

28 の事例から分析してみれば、人民公社時代に建設された固定家屋は事例 2 の 1 軒だけである。それに対して人民公社時代に建設された固定式畜舎が事例 5、6、8、10 の 4 軒である。1983 年から 1996 年にかけて建設された固定家屋が 10 軒、畜舎が 9 軒である。1996 年以降、土地が世帯別に分配された後、固定家屋と畜舎は急激に増加する。新築された固定家屋は 19 軒になり、事例の 9 と 21 はこの間 2 回目の固定家屋を建設した。新築された固定畜舎は 31 軒になった。そのうち 14 の世帯が 2 回目の固定畜舎を建設した。事例 5、10、11 の世帯は 3 回目の固定畜舎の建設をすることができた（表 3）。

2014 年の 8 月の調査時点で、固定家屋を建設していなかった世帯は事例の 13、19、20 であり、今までゲルに居住している。しかし、固定畜舎は全世帯に普及している（表 3）。

表 2　事例 28 世帯の固定建物の数件

事例	固定家屋の数件						固定畜舎の数件			
	建設時期（第一/第二）	面積（m^2）	金額（元）	政府の支給（元）	政府中心地の家屋	ゲルの使用	畜舎の建設時期（第一/第二/第三）	面積（m^2）	金額（元）	政府の支給（元）
1	2014	40	61800	46800	無	有	1999/2002	60/ 60	18000/26000	第二16000
2	1982/2010	40/60	人民公社/55000	0	無	有	1988/1994	60/80	800/6000	0
3	1992/2014	60/40	20000/61800	第二46800	不明	有	1992/2009	30/130	1000/60000	0
4	1989	40	8000	0	無	無	1988/2001	60/60	2000/26000	第二16000
5	2010	30	15000	0	無	有	1983/2003/2011	40/60/60	公社/20000/30000	5000/22000
6	1988/1995	60/60	3000/20000	0	無	有	1982	40	人民公社	0
7	2013	40	0	52000	無	有	2006	80	20000	18000
8	1989	60	5000	0	無	有	1982/2000	50/80	人民公社/20000	0
9	2000/2013	60/40	20000/40000	0	無	有	1996/2001	80/40	8000/5000	0
10	1993/2012	60/50	15000/50000	0	無	無	1982/2000/2005	30/80/60	公社/20000/8000	0
11	1991	60	30000	0	無	有	1994/2000/2004	80/80	併せて70000	0
12	2012	40	55000	0	無	有	2011	60	30000	22000
13	無	0	0	0	無	有	2010	80	8500	0
14	2013	60	60000	0	無	有	2002	80	20000	0
15	2001	50	30000	0	マンション	有	1997/2002	40/100	10000/13000	0
16	2014	70	90000	46800	平屋	無	1996/2007	140/60	8000/15000	0
17	1985/2014	60/40	6000/61800	第二46800	借家	有	1991/2012	140/60	9000/30000	第二22000
18	1995	60	20000	0	借家	有	1991/1993	30/60	800/10000	0
19	無	0	0	0	借家	有	2004	80	8000	12000
20	無	0	0	0	借家	有	2002	30	4000	0
21	2010/2014	40/40	6000/61800	第二46800	借家	有	2009/2010	60（50）	3000	7000
22	2000	60	25000	0	無	無	2000	60	15000	0
23	1992/1995	50/60	15000	0	マンション	無	2006	60	6000	0
24	2011	40	50000	0	借家	無	2011/2014	40/80）	15000/14000）	0
25	2010	60	85000	45000	借家	有	2012	60	30000	22000
26	1992	60	20000	0	マンション	無	1993/2012	60（80）	1000/30000	第二22000
27	2013	40	0	40000	借家	有	1999/2011	100/80）	3000/30000	第二22000
28	1993	60	9000	0	無	有	2009	60	16000	0

固定建物の建設への援助資金の側面から分析してみれば、2001 年以降、畜舎への資金援助が増えている。事例の 1、4、5、7、19 は、畜舎の建設費の約 60％を補助金で賄った。そのうち、事例の 1 と 4 は同じ援助プロジェクトに属している。

2010 年以降には、固定家屋と畜舎両方への援助が増えた。事例の 1、3、7、16、17、21、25、27 が資金の援助を受けて、固定家屋を建設した。世帯数は 8 世帯であり、全調査世帯の 28.6％を占めている。そのうち、事例の 1、 3 、16、17、21 は 2014 年に実施さ

れた同じ援助プロジェクトに属している。事例の 7、27 の固定家屋の建設費の全額が政府から援助されている。そして、事例の 5、12、17、25、26、27 の畜舎の建設費の約 73％が政府の援助で建設された。畜舎の建設の支援を受けた世帯数は合計 11 戸である。

世帯別に牧地分配した後、地方政府は 2000 年からまず固定畜舎の建設への支援を強め、2010 年から固定家屋と畜舎両方への支援を開始したことが明らかになった。事例 1 へのインタビュー調査によると、そのプロジェクト支援は毎年で行うことではなく、地方政府や中央政府の調整によって行われている。バヤンタル・ガチャで大規模な支援が行われたのは 2002 年と 2014 年であった。支援を受けるためにはまずガチャ長に申請し、ガチャの委員会によって結果を決定するという。

固定家屋の面積については、30 平方メートルから 70 平方メートルである。1990 年代に建築された固定家屋は 60 平方メートルの方が多かった。全てが 12 棟である（事例 2、6、8、9、10、11、17、18、22、23、26、28）。60 平方メートルの家屋の間取りは大体 4 室である。この時代に資金に余裕がある者が建設できた。2010 年以降にプロジェクトの支援で建設された固定家屋の面積は 40 平方メートルの方が多かった。40 平方メートルの家屋の間取りは 3 室である。

（2）利用する住居の種類について

2014 年の調査時点までは、ゲルに住居し、固定家屋を建築していなかった世帯は 3 世帯であった（事例 13、19、20）。表 1 によると、この 3 世帯が困窮しているわけではない。大型の家畜は少なかったが、ヒツジとヤギそれぞれ 300 頭（平均 255 頭）以上を飼養している。そのうち、事例の 20 は牧地を夏季、秋季、冬季に 3 つに分けて、季節的移動を行っている。事例の 13 は、牧地を秋季と冬季という 2 つに分けて、年 2 回移動する。しかし、事例の 19 は定期的移動をしていなかった。

ゲルと固定家屋を併設し、居住している世帯は 21 世帯である。調査対象全世帯の 75％を占めている。バヤンタル・ガチャではこの居住スタイルは主流となっている。

スニド左旗では、旗政府所在地のマンドラトのほかに学校が一切設けられていない。前のソム中心地に設けられていた小学校が学校の合併政策によって、2006 年までにマンドラト鎮に移行された。そのため、近年から子女の通学にためにマンダラト鎮に家屋やマンションを借りる牧畜民が増えた。事例の 16、17、18、19、20、21、24、25、27 がマンダラト鎮に家屋とマンションを借りている。年齢的には 40 代が多かった。老齢の母親が子女の面倒を見ながら住み慣れない町に暮らさなければならない。町での暮らしは各種の出費も高いという。

さらに市場投資として町に住宅を購入する牧畜民が現れている。事例 15、16、23、26 の世帯は、政府中心地マンドラト鎮にそれぞれ普通のレンガ作りの部屋と住宅を持っている。

2008 年からマンドラト鎮にマンションがたくさん建築されるようになった。家畜は、牧畜民自らが生業的に消費する肉や乳製品、獣毛などの供給源でもあり、またウマなどの大型家畜は移動・運搬手段という性格も有しているが、現在の牧畜民にとって、家畜は自給用というより商品という性格の強い存在になった（尾崎 2017:74）。2012 年のころから家畜の価格が上昇し、ピークの時期であった。2014 年から、内モンゴルにモンゴル国か

らの肉の輸入開始などの要因によって家畜の価格が低迷したが、2018 年、2019 年に入ってから回復している。

事例 23 と事例 26 は 2012 年、事例 15 は 2014 に住宅を購入している。事例 16 は 2007 年にレンガ作りの部屋を購入したという。年齢的には 3 人は 40 代で、1 人は 30 代である。住宅への投資は主に若い世帯主を中心に行われている。

5. 事例 1 の分析

筆者が 28 事例の中で固定式建物についてより詳細的な調査を行ったのは事例 1 である。以下は、事例 1 の 1960 年代以降の放牧範囲の変化、定住地の形成過程、牧地での定住位置の設定について分析する。

事例 1 の世帯主の名前は Norb（以下 N 氏とする）という 70 代の牧畜民である。2014 年の調査時点では 60 代だった。N 氏は 1945 年に、バヤンタル・ガチャで生まれた。筆者が初めて顔を合わせたのは 2012 年の 8 月であった。その後 2014 年 8 月と 2019 年 6 月に聞き取りを行った。

N 氏の家族構成は、N 氏（1945 年）、N 妻（1947 年）、長男（1971）、長女（1974）夫婦と子供、次男（1981）夫婦と子供である。次男夫婦と子供はスニド左旗政府の中心地マンドラト鎮に暮らしている（図 4）。

（1）放牧範囲の変化

1961 年に、N 氏は 16 歳から牧畜民の生活を送ることになった。その時現在の定住場所から東南 5km 離れたウラン・チャブというところで、母親とほかの 3 世帯と一緒に 1 つの「ホト・アイル」としてバリガードの家畜を放牧していた。ウシは約 80 頭、500 頭のヒツジとヤギがいた。私有家畜はウシ約 2 ～ 3 頭、十数頭のヒツジがあったという。

当時バヤンタル・バリガードでは、5 つの大きな井戸があった。重要な水資源としての 4 つの大きい開放式井戸はバヤンタルの中部低平原地域に分布する。バヤンタルでは中部平原地域の水を得やすいところが夏と秋の宿営地として利用されていた。北部と南部の高平原丘陵地域が春季と冬季の宿営地になっていた。おおむね夏に集まり、冬は分散するというパターンを繰り返していた。牧畜民がバリガードごとに統一的に管理され、放牧が遊牧の形で毎年の宿営地を移動する。「ゾド」と呼ばれる雪害のときや、「ガン」と呼ばれる

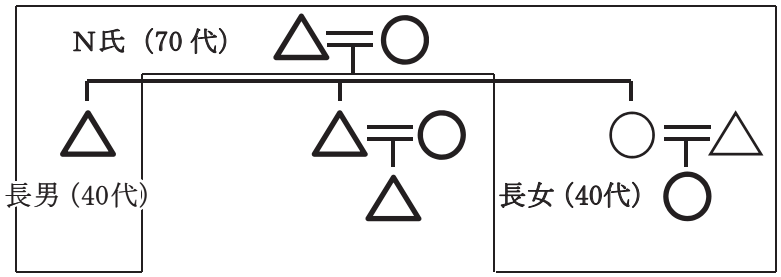

図 4　N氏の親族図（2019 年の 6 月の聞き取り調査より作成、三角が男性で、丸が女性である）

干害のときに、オトル[7]が頻繁に実施されてきた。災害が発生する年はバヤンタル以外の地域にオトルに行く場合もあった。北はモンゴル国の国境まで、南はスニド左旗の南部地域まで、旗境を超えてチャハルまでいくことも普通である。氏の回顧では、一番印象に残ったオトルが 1962 年のことであった。この年にスニド左旗全地域では深刻な干ばつが発生した。氏は干害へ対応するために地方政府の調整によってバリガードの一部の家畜を連れて東方にオトルに行った。途中でアバガ旗、東ウジュムチン旗を通過し、フルンボイル盟に到着した。往復で距離は約 2000km であった。バヤンタルに戻ってくるまで約 2 年半かかったという。オトル移動の中では「ホト・アイル」のリーダーの役割は需要だった。モンゴル語ではリーダーのことを「ガルイン・アフ」（火の兄）と呼ばれる。1964 年に、氏のフルンボイルから帰ってきた後、バヤンタルでは固定式建物がよく建築されるようになったという。この時点では N 氏の放牧範囲は基本的にバヤンタル・ガチャ内であり、災害などへの対応するために旗外の地域にオトルに行く場合も頻繁であった。

1970 年代後半期から N 氏は、M 氏と G 氏 2 つの世帯と 1 つの「ホト・アイル」として、家畜を飼養するようになった。当時 3 世帯はゲルに住んでおり「ホト・アイル」のなかに１つの固定式畜舎があり、共用で使っていた。この「ホト・アイル」のメンバーは 1996 年土地分配まで続いていたという。

1984 年の家畜の分配では、N 氏の家族 5 人に、ヒツジ 112 頭とヤギ 17 頭、ウシが 13 頭分配された。私有家畜はウシ 5 頭ほどであった。M 氏には 25 頭のヤギと 124 頭のヒツジ、21 頭の牛が分配された。G 氏にはヤギ 34 頭とヒツジ 151 頭、ウシ 27 頭が分配された。ヒツジとヤギの群れとウシの群れを一緒に放牧し、群れを各世帯交代する形で管理していた。

土地の分配は家畜の分配と同時に始められ、「ホト・アイル」の範囲で使えるようになった。1991 年に、各世帯の所有する牧草地の面積が基本的に決められた。N 氏の牧草地が 886.7ha（13300 畝）、M 氏の牧草地が 540ha（8100 畝）、G 氏の牧草地が 1074.6ha（16119 畝）である。当時各世帯の牧草地面積が決められていたが、1996 年までの放牧範囲は「ホト・アイル」であった。

1996 年に、各世帯間の境界線はスニド左旗の草原局の測量によって詳細になった。以下の図 5 と図 6 は衛星画像によって作成したものである。図 5 は N 氏の 1970 年代後半期から 1996 年かけての「ホト・アイル」での牧地の利用範囲である。図 6 は 1996 年から今までの各世帯の牧地範囲である。世帯別で放牧範囲は「ホト・アイル」の放牧のときから 1/3 ほどに縮小している。現在、各世帯が固定家屋と畜舎を建築し、1980 年代の共用の 1 か所から 4 か所まで増えた（図 5、図 6）。

（2）固定式建物の建築過程

N 氏の家族は現在、完全に定住しており、他の家族と牧草地を共用して利用することはなく、分配された牧草地内で家畜を放牧している。畑などで野菜を栽培した経験はない。N 氏の家屋はスニド左旗の人民政府所在中心地からバヤンウールソムに向かう幹線道路を北 37km 行き、そこから東北へ約 5km 離れたところに位置する。

7　オトルとは：牧畜民が基本的な季節移動のほか、夏秋は家畜をよく太らせ、冬春は家畜の体力を保持させ、災害の場合はそれから脱するために、一部の者が家畜の一部を連れて牧地を移動することである。

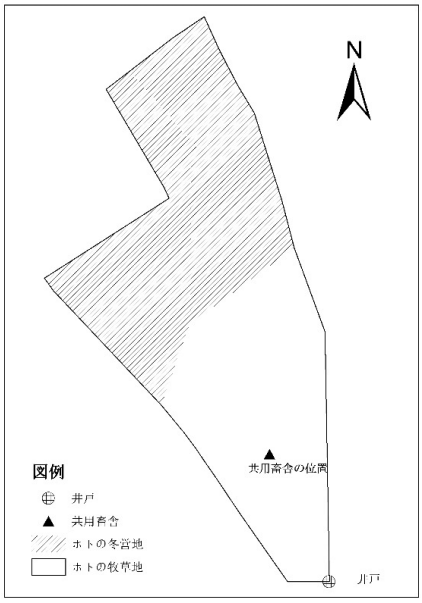

図 5　1980 年代年ホト範囲

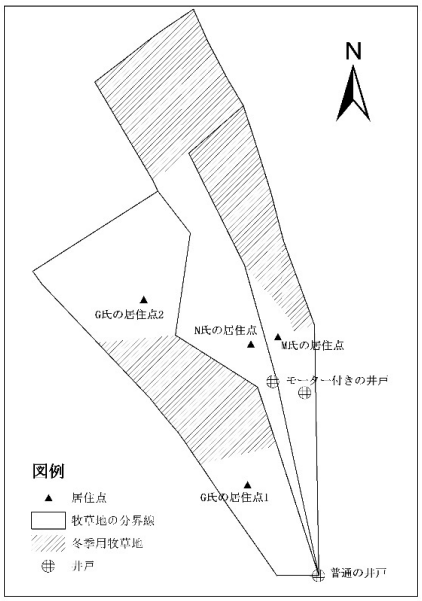

図 6　1996 年以降の牧地範囲

（衛星画像と聞き取り調査により作成）

氏の家から距離的に最も近い家族は以前の「ホト・アイル」で一緒だった M 氏の家であり、正東に 0.5km 離れたところにある。もう一つは G 氏の家であり、西南に約 2.5km 離れたところにある（図 6）。それぞれの牧地で放牧するようになったため、助け合って仕事をすることが出来なくなり、日常的な交流も少なくなったという。

N 氏の定住点は地図 7 に表すように、主に固定家屋、ゲルと畜舎①、②から構成される。最初この居住点に建てられたのは、1999 年に建築された畜舎①である。面積は約 80m^2 の瓦付きレンガ造りの畜舎であり、300m^2 の石造りの囲いで構成されている。当時約 1.8 万元かかったという。この畜舎が建てられた時期に始めて氏の家族は四季を通してこの居住点で定住するようになった。その後は、2002 年に、前の畜舎の隣にもう 1 つの畜舎②と、真ん中に干し草を備蓄する囲いを建てた。この畜舎②が建てられた時、当地政府のプロジェクトの助成を受けた。氏は自分で 1 万元を出し、残りの 2.6 万元を政府が払った。建設は全て政府の指定した建設隊が担当した。畜舎の面積は約 100m^2 である。氏は現在では、畜舎②を主に冬季にヒツジとヤギを囲い、出産時期に使っている。畜舎①をウシのために使っている。

2014 年に、氏の子供たちが住まう固定家屋が建設された。これは畜舎②が建設された 15 年後のことであった。固定家屋は当地政府のプロジェクト助成を受けて新築されたものである。自身で 1.5 万元を負担し、残りは政府の援助であった。レンガ造りの平屋の固定家屋は面積 40m^2 で瓦屋根であった。1999 年の畜舎①の建築から 2014 年の固定家屋の建築まで 15 年を経て完全した。

写真 1 は氏の定住点の正面写真である。固定家屋の外の北側には風力発電機がある。N 氏夫婦 2 人は現在まで固定家屋の外の東側に建てられたゲルに住まう。「今は定住したのに、なぜ固定家屋に住まないのですか」と聞くと、氏は「これまで（一生）ゲルに住んでいたから、これは私たちの習慣だよ。固定家屋に住まうことはあまり好きではない。ゲル

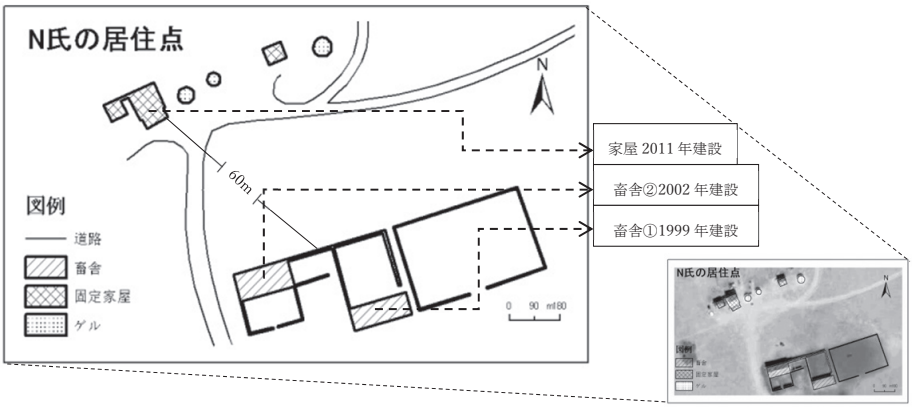

図 7　N氏の定住点の衛星画像（衛星画像と聞き取り調査により作成）

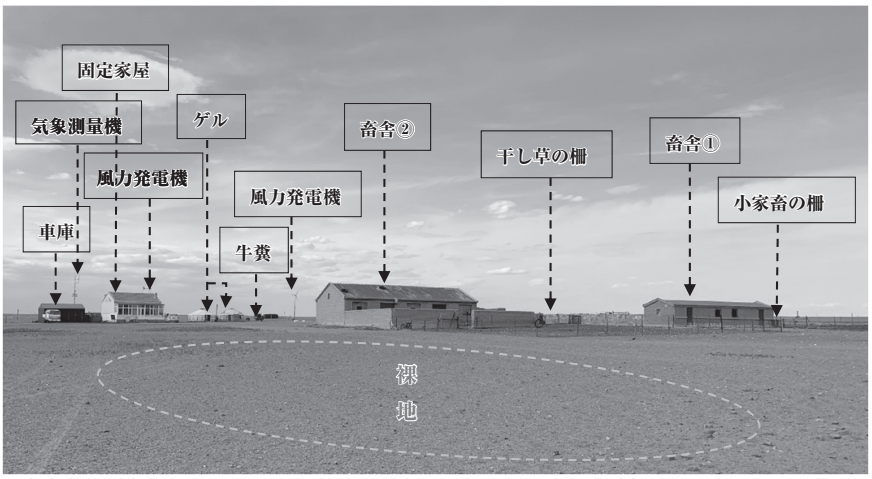

写真 1　N 氏の居住正面写真（2019 年 6 月　筆者撮影）

の方が出入りが便利だし、冬は温かい」と答えた。隣の東側には、もう一つの台所用の小さなゲルが用意されている。さまざまな要因によって定住した後でも、氏の生活習慣はあまり変わっていない。もし固定家屋に住んでしまったら本格的な牧畜民ではないと言わんばかりに、遊牧生活へのノスタルジーがまだ強いことが話のなかから読み取れる。

固定家屋が建築されたとともに、さまざまな付属施設が設置されるようになっている。家屋の西側には 2016 年に建てられた車庫がある。バイクや四輪駆動車の置き場所となっている。

2012 年に 3 万元で、四輪駆動車を購入した。マンドラト鎮の中心地への買い物や、子供の学校への送り迎えのための交通手段として使用している。

2014 年に 4 万元で、小型のトラクターを購入した。井戸から定住点への水の運搬をする場合と干ばつなどが発生したときに、離れた牧地に家畜を運搬する場合などで使用している。

エネルギーに関して、彼らは風力発電機を利用している。風力発電機は 2015 年に政府のプロジェクトの助成で購入したもので、家屋の裏側に設置されている。氏は自分で 2,800 元を支払ったという。用途はもっぱら電灯とテレビ、携帯電話の充電などである。

燃料は主にウシのフンと、フルジン（*hurjin*）というヒツジのフンである。しかし、レンガ造りの平屋を建てた時から、冬期の暖房用に石炭を使用するようになった。一年を通じて 11 月から 3 月までの 4 ヶ月の間に、約 2 トン程度使用する。なお、1 トン 180 元で購入しているという。

氏の定住点の構成は、畜舎の建設から始まったことがここで明らかになった。固定家屋の建築は畜舎が建てられてから約 15 年後のことである。自然環境の条件が厳しい乾燥草原では、牧畜民が自分自身より、家畜のため様々な対応をしていると考えられる。そして、畜舎の建設から進んだ居住の定住化は、多数の付属設置をもつようになった。

（3）定住地位置の設定

1984 年に「ホト・アイル」と 1996 年に世帯別、それぞれ牧地が分配された後、2000 年頃から N 氏は牧地を G 氏と M 氏の牧地から分けて、個人的使用を始めた。牧地の面積は 886.7ha（13300 畝）で、種類は主に平原草原地である。

氏は最もよい牧地と言われる、固定家屋から西北部 3.5km 離れた 400 ha（600 畝）の牧草地を柵で囲った。そのあと、2006 年までに全ての牧地を柵で囲ったという。西北部の 400ha の牧草地は冬季に使う牧草地である（図 8）。一般の状況では、11 月から初めて使用する。ウシを 11 月から 5 月の中旬まで放牧し、ヒツジとヤギの群れは 11 月下旬から 5 月までここで放牧する。しかし、牧地の草の状況によって放牧時間は短縮される場合がある。

居住点の西部の牧草地と南井戸までの細い牧草地は主に夏季に使う牧地である。西北部冬季牧草地までのところは秋に使う牧草地である。干ばつなどが発生する場合は、他の地

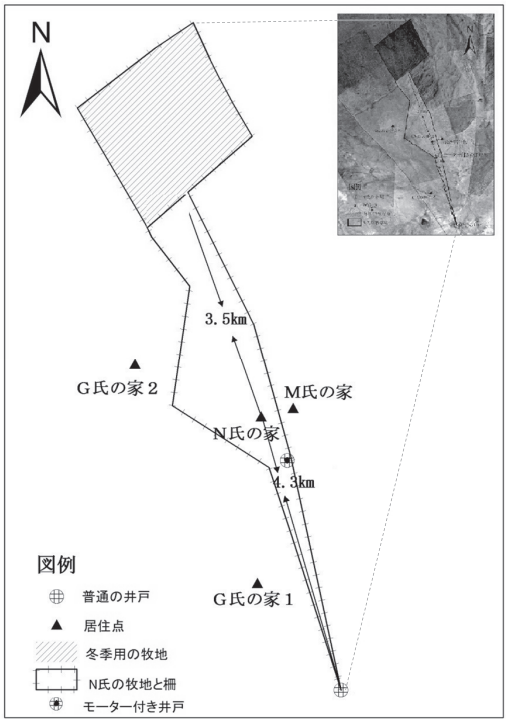

図 8　N 氏の牧地の衛星画像

方に牧地を借用して移動する。最近では、2017 年にそれが生じたという。

乾燥地では、人間と家畜にとって井戸が重要な水資源となっている。井戸を掘るのが難しく、バヤンタルの牧畜民は自分の牧地で水を探すため、13 回井戸を掘ったこともあった。N 氏の家族は 2014 年までは、自家に使う水を図 6 の通常の井戸がある家から 4.3km 離れる井戸から運んで得ていた。この井戸は 1960 年代にバリガードから掘られたホシムグ（*hoshimug*）という開放式井戸である。その時代バリガードの 5 つの大きい井戸の 1 つで、深さが約 12m の開放式井戸である。氏は 1999 年に、畜舎を建て定住したあと、水を運ぶためにラクダ車と牛車をよく使っていた。定住地から井戸まで往復で 3 時間かかるため、1 回運んできた水を約 2 ～ 3 日かけて使っていた。しかし、夏に気温が上がると家畜が飲む水の量は多くなるため、家畜が水を取るために毎日井戸へ向かう必要があった。2004 年頃から、畜舎の近くに貯水槽を作って、水を運んで使っていた。それでも、距離的な問題は解決したものの、今度は別の問題が発生したという。夏は井戸から水を汲む世帯が 23 戸ほどあったため、利用する時間が重なって、水が足りなくなる場合もあった。「家畜の水を得ることは本当に大変なことだった」と氏は話していた。

2014 年に、氏は家から 500m 離れたところにモーター付き井戸を作った。井戸の深さは 55m であり、政府のプロジェクトの助成で作られたものである。氏自身は 1 万元を払い、政府から 1 .8 万元が助成された。

氏の定住点の起点は 1996 年に牧地が世帯別に分配された後、1999 年に固定式畜舎の建築から始まった。牧地が分配されるとき、井戸の利用などの要素を考えて分配されたということで、牧地の形が長い細い形になった（図 8）。氏の定住地の位置は、草が良いとされる冬営地から 3.5km 離れており、開放式井戸から 4.3km 離れている真ん中ぐらいのところに設置されている。

6. 結論

（1）まとめ

本論では、まず 28 世帯の事例に基づいて固定式建物の建築年、政策との関連、利用する住居の種類について分析した。その結果を以下の通りまとめることができる。固定家屋と畜舎の新築数の各年代における増加傾向を考察してみると、事例 2 の人民公社時代に建築された固定家屋と事例の 23、25、26、28 を除いて、全て 25 世帯の固定畜舎の建築時期が固定家屋より時間的には早かった。そして、事例 23、25、26、28 の世帯主は 30 代から 40 代の若い人である。このことから、バヤンタル・ガチャにおける牧畜民の固定式建物の建築は固定畜舎の建築から始まったと判断できる。さらに、2014 年の調査時点で 3 世帯は固定家屋を建築していなかった。しかし、固定畜舎は全ての世帯に普及している。

人民公社時代に建設された固定家屋は事例 2 の 1 軒、固定式畜舎が事例 5、6、8、10 の 4 軒である。1983 年から 1996 年にかけての時期に建設された固定家屋が 10 軒、畜舎が 9 軒である。1996 年以降、土地が世帯別に分配された後、固定家屋と畜舎は急激に増加した。新築された固定家屋は 19 軒になり、事例の 9 と 21 はこの間 2 回目の固定家屋を建築した。新築された固定畜舎は 31 軒になり、全て 14 の世帯が 2 回目の固定畜舎を建築した。事例 5、10、11 の世帯は 3 回目の畜舎を建築することができた。

建築の動機を考察するならば、牧地の分配政策は間接的なものであった。牧地が世帯別

に分配された後、放牧範囲が縮小し、遊牧移動の余裕がなくなった。直接的な動機においては、1990 年代に生活に比較的余裕がある牧畜民が先頭となって固定家屋の建築を始めた。家屋の面積面でも比較的広い（事例 3、6、8、10、11、15、17、18、23、26、28）。2002 年から政府のプロジェクトによる援助を動力とした固定畜舎が増加してくる（1、4、5、7、12、17、19、21、25、26、27）。2010 年以降は政府のプロジェクト支援を動力とした固定家屋が増加してきた（1、3、7、16、17、21、25、27）。その内、2014 年には事例の 1、3、16、21 は同じプロジェクト支援を受けたことが調査データから明らかになっている。そして、現在の時点ではゲルと固定家屋を併設した定住方式が主流スタイルになった。

その一方、旗政府所在地のマンドラトのほかに学校が一切設けられていないという関係で、近年、子女の通学にためにマンダラト鎮に家屋やマンションを借りる牧畜民が増えた。家畜の商品化が強くなり、価格の上昇などによって、若い牧畜民を中心として町への住宅の購入も行われている。

第 5 章では、より詳細な調査を行った事例 1 の実態に基づいて、氏の放牧範囲の変化、固定式建物の建築過程、牧地での位置の設定などについて分析した。1970 年代後半期から氏の放牧範囲は大きく変化があり、基本的にガチャ内から「ホト・アイル」の牧地範囲まで縮小される。その時期に「ホト・アイル」の冬営地で固定式畜舎を建築した。1984 年の「ホト・アイル」範囲の土地の分配と、1996 年の世帯別の分配がなされた後、N 氏の家族の定住化が強く進んだ。1999 年と 2002 年にそれぞれ固定式畜舎を建築した。その後 15 年ほど経って固定家屋を建築するようになった。しかし、現在まで、夫婦二人はゲルに居住しており、彼らはこのことをモンゴル人の当然の生き方として認めている。話の中では「牧畜民の定住化は固定式建築と必ず関係があり、中央政府の一貫性の定住政策のもとで強制的に行われた」ことを強調していた。1990 年代の定住化が強く進められていた時期には、牧畜民の豪華な固定家屋がその家庭の裕福さを表現するように宣伝されていたこともあった。氏は固定式建物を中心した定住牧畜生活に対して反対意見を持って、今後の牧畜地域では遊牧を展開することが何よりも重要であることを若者モンゴル牧畜民たちに説いていた。バヤンタル・ガチャの場合、四季の宿営地のどこから定住化が行われきたかという問題については、牧地の分配以前において冬営地では固定施設が普及していたと言える。しかし、牧地が世帯別に分配された後、N 氏は牧地に新しい場所を選んで冬季の放牧牧地と、水場の中央に定住地を設定した。そして、氏の完全な定住化は固定畜舎の新築から進み、その後 15 年を経て固定家屋を建築するに至った。

（2）今後の課題

本論で取り上げている調査データは主に 1980 年以降のものである。調査の際、牧畜民が固定家屋と畜舎を設置し始めた時期を記録し、その建築動機について分析を行った。
今後は 1980 年代以前における遊牧の距離と範囲の変化、定住化という問題のなかで固定施設はそれとどのような関わりがあったのかを明らかにする調査を行う。そして、これまでの牧畜に関わる先行研究において定住化と固定家屋の問題はどのように取り上げられてきたのか、1940 年代における調査データなどを参照しながら進めていきたい。

謝辞

本調査では現地の多くの方々に大変お世話になりました。スニド左旗バヤンタル・ガチャのノルブ氏のご家族に感謝を申し上げます。千葉大学人文公共学府ユーラシア講座の児玉香菜子先生、吉田睦先生、周飛帆先生をはじめとする諸先生方から授業やゼミを通じて、貴重なご助言やコメントをいただきました。調査に支援をくださった内モンゴル師範大学の海山先生に感謝を申し上げます。千葉大学人文公共学府博士後期課程の阪口諒氏、ソロンガ氏には日本語の添削をしていただき、ありがとうございました。

参考文献

（日本語）

阿拉騰

1999「内モンゴルにおける遊牧と定住化―アダリガ・ホトの事例から」『北方学会報』6、pp.8-21

阿栄

2018「内モンゴルゴビ草原における牧畜民の固定家屋（バイシン）の現状とその間取り変容」『日本家政学会誌』69（6） pp.448-461

梅棹　忠夫

1991『回想のモンゴル』中央公論社

尾崎 孝宏

2001「南モンゴルにおける人口流動と家畜流動 - シリンゴル盟の事例」『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』54 pp.115-137

2003「内モンゴル牧民 に関する「遊牧」論的比較考察」『鹿大史学』50 pp.11-31

2017「内モンゴル遠隔地草原における牧畜戦略」『文化人類学』82（1）pp.73-92

2019『現代モンゴルの牧畜戦略―体制変動と自然災害の比較民族誌』風響社

小長谷有紀

2001「定住化過程におけるモンゴル族の牧畜経営－錫林浩特（シリンホト）市内の事例から」佐々木信彰編『現代中国の民族と経済』世界思想社 pp.185-207

2003「中国内蒙古自治区におけるモンゴル族の季節移動の変遷 ― 錫林浩特市域の事例から」塚田誠之編『民族の移動と文化の動態』pp.69-106 風響社

小長谷有紀・シンジルト・中尾正義 編

2005『中国の環境政策「生態移民」―緑の大地、内モンゴルの砂漠化を防げるか？』昭和堂

児玉香菜子

2005「中国内モンゴル自治区オルドス地域 ウーシン旗における自然環境と社会環境変動の 50 年」『地球研究 10.1』10(1) pp.71-80。

2009「中国乾燥地における緑化技術とその将来 V 緑化思想とその解体―中国内モンゴルの緑化の現場から」『日本緑化工学会誌』34(4) pp.610-612。

2012『「脱社会主義政策」と「砂漠化」状況における内モンゴル牧畜民の現代的変容オルドス地域農耕民とゴビ地域遊牧民の事例』アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明研究会

中尾　正義、フフバートル、小長谷有紀、
2007『中国辺境地域の 50 年―黒河流域の人びとから見た現代史』東方書店
野村理恵、中山徹、今井範子、YARU、YONGMEI
2010「牧畜民の定着化過程における「ホト」の形成と居住形態の変化 中国内モンゴル自治区シリンゴル盟じょう黄旗の「ホト」を事例として」日本建築学会計画系論文集 74（651）pp.1141-1149
那木拉
2012「ゲルの変遷と空間変化―ゲルから固定家屋へ移住を考察して」『千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』241　pp.65-89
星野仏方、橋本未来、GANZORIG Sumiya、SURIGA、松原奈央、SAIXIALT
2012「家畜行動解析によるモンゴル高原の持続可能な利用方法について」『酪農学園大学紀要 自然科学編』37(1)　pp.79-85。
楊海英
2001 「遊牧から定住へ」『モンゴル高原における遊牧の変遷に関する歴史民族学的研究』国立民族学博物館　pp.91-100。

（中国語）
海山
2012「锡林郭勒盟牧区牧民定居模式及其生态效应探讨」『昭和女子大学国际文化研究所纪要』3　pp.5-17
2014「内蒙古牧区人地关系演变及调控问题研究」内蒙古教育出版社
李文军、张倩
2009「解读草原困境：对于干旱与半干旱草原利用和管理若干问题的认识」经济科学出版社
『苏尼特左旗畜牧志』
1995 内蒙古文化出版社

（英語）
Humphrey, Caroline and Sneath,David
1999 *The End of Nomadism?*. Duke University Press
Hoshino Buho, Masami Kaneko, Teruo Matsunaka, Satomi Ishii,Yoshihito Shimada, Chifumi Ono
2009 *A comparative study of pasture degradation of Inner Mongolian fenced and unfenced land based on remotely sensed data*: Journal of Rakuno Gakuen University 34（1）pp.15-22

（モンゴル語）
čidenǰab(チデンザブ)
2011 『*bayantal-in tal nutug-un teühen hobiral*』öber　mongol-un xeblel-un　xoriy-ɑ（『バヤンタル草原の歴史記録』内モンゴル出版社）
hɑsbɑγɑn-ɑ、sečintü（ハスバガナ、スチント）
2009 『*čing-un noyalal dooraxi mongolčood*』öber　mongol-un　ɑrɑd-un　xeblel-unxoriy-ɑ

（『清朝時代のモンゴル歴史』内モンゴル人民出版社）
（辞書）
内モンゴル大学モンゴル学研究院、モンゴル語研究所
2016 『蒙漢辞書』内蒙古大学出版社